

18 年 03 月 22 日

環境・生命 工学専攻	学籍番号	039403
申請者氏名	BAMBANE SETIA BUDI	

指導教員氏名	大貝 彰 渡邊 昭彦 泉田 英雄
--------	------------------------

論文要旨(博士)

論文題目	A Study on the History and Development of the Javanese Mosque
------	---

(要旨 1,200字程度)

本論文は、東南アジアで最もイスラーム受容が早く、また最も多くのモスク建築が建てられたジャワ島を取り上げ、その発展過程と形態的特徴を明らかにしようというものである。扱う時代範囲は、イスラームがジャワで受容される15世紀初頭から、モスク建築様式が多様化し始める19世紀末までとする。研究方法は、これまで建設が知られているほとんどすべてモスクに関して、既往研究と古文書の文献調査、フィールド調査、モスク関係者や郷土史家への聞き取り調査によって関連する資料を収集し、建築史データを編年的に整理するとともに、平面形態と構造形式を類型化する。その中で具体的に議論するテーマは、1) ジャワのモスクの起源論、2) モスクの建設経緯と役割、そして3) 平面形態と構造形式の類型的特点の三つである。

第1の目的は、起源に関する既往の理論に建築史学から批判を加え、最も可能性の高い理論を導き出すことである。既往研究を分析した結果、ジャワのモスク様式は、外来建築の伝播説とジャワ在来建築からの発展説という二つに大別されることがわかった。前者に関して、遠隔地の建築を結びつけるための合理的な根拠が存在せず、信憑性は薄いといわざるをえない。それに対して、ヒンドゥー時代の公共建築を基にしたという後者の理論は、イスラーム受容以前に建設されたヒンドゥー寺院の浮彫に類似した建物が描かれており、また初期イスラーム布教者たちが既存文化を尊重したこと、非常に説得力があり、宗教を跨いだジャワ建築の連続性が認められる。

第2の議論のテーマは、ジャワのモスクがいつ、どのような背景と役割を持って建設されたのかを文献調査を通して明らかにすることである。まずジャワの政治的時代区分に従い、1) イスラーム王朝支配下で建設されたモスクと、2) オランダ植民地時代に建設されたモスクの二つに大別した。文献調査と聞き取り調査により、前者に該当する71事例のほとんどが最初期イスラーム指導者、スルタン、王家族、あるいは王の支援のもとイスラーム指導者によって設立されたことが明らかになった。後者には40事例が該当し、スルタンや王子の位の人々とともに、オランダ植民地権力に任命された郡長によって設立されたことが明らかになった。

これらモスクの役割は、1) 大モスク、2) 宮殿内モスク、3) 地区モスク、4) 孤立モスクの4つに大別されることがわかった。さらに、ジョクジャカルタ王朝下には、境界モスクと呼ばれる特異な地区モスクが存在することが明らかになった。大モスクの設立経緯と役割に関して、本研究ではイスラーム王朝下とオランダ植民地支配下で設立されたものとは大きな相違があることが明らかになった。

第3の議論テーマは、主礼拝空間とその屋根を支える親柱の基本構造に焦点を当て、その平面形態と構造形式を分析し、類型化することである。文献調査と聞き取り調査を通して、調査対象時期に少なくとも127棟のモスクが建設されており、約8割の97事例は親柱を持っていたことがわかった。主礼拝空間の平面形態と親柱の配置を分析したところ、正方形の平面形態と4本の親柱を持つ形式(正方形平面4本親柱形式)が最も多いことがわかった。これはジャワのモスクの基本形であると考えられ、いくつかの変容形が存在する。以上のことから、ジャワのモスクは世界のモスク建築の中で独自の発展と形態的特徴を持っていることが明らかになった。